

リスク要因に着目した学校不適応に関する研究の動向

A Review of Psychological Risk Factors in School Maladjustment

鈴木 美樹江¹⁾, 加藤 大樹²⁾

Mikie SUZUKI, Daiki KATO

はじめに

近年、学校場面ではじめ、不登校、自傷行為、暴力行為等の学校不適応に関する問題を抱えている子ども達が数多くいる。その背景としては、地域や家庭内のつながりの脆弱性、また子ども達が直接遊ぶ機会の減少による対人関係の希薄さ等、数多くの要因が重なり合う形で、子ども達の発達に影響を与えていることが考えられる。

このような問題が指摘されるなか、不適応問題が深刻化する前段階で大人が察知し、介入する等の予防的観点からのアプローチの必要性が求められている。すなわち、不適応問題を生じている子ども達への丁寧な支援（3次予防）も行いながらも、不適応徴候が見られる子どもや、リスクの高い子ども達に対しては早期の段階で介入すること（2次予防）、また全ての子ども達を対象としたコンピテンス向上のための心理教育を提供する（1次予防）等、階層的なアプローチ方法について研究が進められてきている（Durlak, 1995）。

その理論的根拠のひとつとして国際的に注目されているのが、リスク要因およびプロテク

ト要因に関する研究である。すなわち、どのような環境や個人的側面をもつ子ども達が不適応となるリスクが高いのか、また逆にどのような環境や個人的側面を持つことが、子ども達にとって不適応となることを防ぎ、そして子ども達を守ることができるのかといった観点である。

本研究では、（不）適応についての概念についてまとめた後、子ども達の学校不適応に影響を与えるリスク要因について国内外の研究について概観する。そのうえで、不適応リスクを緩和するための視点について展望する。

適応（不適応）の概念

適応については、多くの概念が提出されており、統一した見解が得られていない現状（Ladd, 1996）にある。そのなかで原田・竹本（2009）は、適応の概念について環境と個人といった観点より大きく2つに分けられると指摘している。一つ目に、適応とは個人と環境との関係を表す概念であり、両者が調和した「状態」である（内藤ら、1986；大久保、2005）との捉え方である。二つ目に、適応とは人がその内的欲求と環境との間により調和的な関係を作り出そうとして、行動を変えていく連続的な「過程」である（北村、1965）

1) 金城学院大学心理臨床相談室

2) 金城学院大学人間科学部

との捉え方である。このように両者とも、適応とは“個人”と“環境”との関係を表す概念であるという点は一致していると考えられ、逆に不適応とは環境と個人の内的欲求とのギャップが生じている状態であると定義付けられるのではないだろうか。そこで、本稿では学校不適応に關与すると考えられる環境要因と個人内要因に着目し、とくに環境に関する不適応リスク要因と個人内における不適応リスク要因について、以下にまとめることとする。

学校不適応に關連するリスク要因

ここでの「リスク要因」という語は、不適応への可能性を助長するあらゆる影響を意味し、より深刻な不適応状態へと悪化させることや、不適応状態を持続させることに寄与する影響として用いる (Coie et al., 1993)。そこで、まず環境要因については、家庭要因と友人関係要因について取り上げ、その後個人内要因についてもまとめることにする。

①環境要因

家庭のリスク要因

家族との関係性について調査した研究では、子どもの不適応と夫婦関係の乏しさ (Buehler et al., 1997)、子どもを含んだ家族同士との関わりの希薄さ (Resnick et al., 1997) が、学校場面における不適応にも關連していることが示唆されている。また、親がうつ病や統合失調症の疾患を有している場合、そうでない親に比べて、子どもが学校で問題行動を起こしており、子どもの精神疾患の出現率も高いことが報告されている (Weintraub, 1987)。すなわち、統合失調症の母親は、妄想や幻覚、不条理な感情といった症状のため、またうつ病の母親も抑うつ症状を起因としたエネルギーや興味の減退により、子どもへの

応答性が乏しくなることが、子どもの問題行動につながっているのではないかと推察されている (Goodman, 1987; 菅原, 1997)。とくに抑うつ症状をもつ母親は、子どもの社会的引きこもり、身体化症状、不安や抑うつ、及び外在化問題 (注意欠陥、多動、攻撃的行動、非行) 等との關連が報告されている (Lee & Gotlib, 1989)。これらの母親の抑うつ症状と問題行動を媒介するものとして、母親と子どもの温かい関係が關与していることが明らかになっており、母親の抑うつにより、母子関係の温かさが失われることで、子どもの問題行動の頻度が高まることが示唆されている (Harnish et al., 1995)。しかしながら、菅原 (1997) も指摘している通り、たとえ母親がうつ症状を有していても、母親以外の父親や祖父母、教諭等複数の愛着対象がいることで、その後の発達への影響は異なってくると考えられる。具体的には、生徒が先生との関係を良いものだと経験することで、ネガティブな感情を保護してもらい、情緒的な問題に対処する力を増やすことができるとの指摘もある (Solomon et al., 2000)。うつ病を持つ母親との関係を有する子どもに関しては、教諭やスクールカウンセラーが関わりを増やすことで、生徒が悩み事などを話せる環境づくりをしていく必要がある。

一方家族からの子どもへの不適切な関わりによる暴力のサイクルに關連した研究もみられる。虐待を受けた子どもは、そうでない子どもよりも、思春期行動上の問題を起こしやすいことが広く指摘されている (Rutter et al., 1998; Widom, 1999)。その背景としては、虐待を受けた子どもは、虐待を受けなかった子どもと比較すると、感情の統制、共感性の表出、自分の興奮状態の見極め、社会的な情報の解釈において深刻な問題を示しやすい (Dodge et al., 1990)。その結果、他者の行動

の解釈や感情の抑制がうまくできず、暴力や他者をいじめるなど攻撃的な行動に関するリスクが増加する（Dodge et al., 1990）。

また、親子の愛着関係などの関係性といった観点より学校不適応との関連について調査した研究も見られる。親子間が相互に不信がある場合、学校生活においても不適応傾向が高い点や（酒井ら, 2002）、幼少期の父母に対する愛着と学校不適応についても関連があることが示唆されている（五十嵐・萩原, 2004；Ainsworth et al., 1978）。具体的には、男子の場合は幼少期の親との不安定な関係が、その後の児童期における攻撃性や引きこもりを予測している（Ainsworth et al., 1978）。一方、女子の場合は幼少期の母親への愛着が不安定な場合や父母間の愛着にズレが生じている場合に、不登校傾向が高まることが指摘されている（五十嵐・萩原 2004）。以上のように、学校不適応に関連する家庭要因としては、家族および親子間の関係性の乏しさが、子ども達の学校不適応感に影響を与えていることが示唆される。

さらに社会的スキルの欠けた家族関係では、子どもも社会的な手がかりを「読む」ことや、行動を適合させる方法が分からないために、支えてくれる仲間もできず、孤立しやすいことが指摘されている（Buhrmester, 1990；Savin-Williams & Berndt, 1990）。このように家庭内での社会的スキル経験の乏しさから、子ども達が社会的スキルを習得する機会が不足することにつながり、結果的に友人関係を築いていく際に負の影響を及ぼしている可能性についても明らかになってきている。

友人集団のリスク要因

友人との良好な関係は、発達的な側面、健康、そして学校適応において重要な役割を有している（Asher & Rose, 1997）。我が国にお

いても、友人との良好な関係が、学校ぎらい感情（古市, 1991）や欠席願望（本間, 2000）を低減する結果が得られている。

それでは、青年期における良好な友人関係とは、どのような友人関係を示すのであろうか。従来、青年期は第二の分離個体化と呼ばれ、親からの精神的自立に伴う孤独感をもちやすくなるが、その際に友人との関係が重要となることが指摘されていた（Blos, 1967）。具体的には、友達と一緒に活動することで、考えや意見を交換したいと願う（Youniss & Smollar, 1985）、親密で内面を開示するような関係を求め、これが新たな自己概念を獲得することにつながる点が指摘されていた（西平, 1973）。しかし、近年友人関係の表面化、希薄化が指摘されている（上野ら, 1994）。具体的には、友人から低い評価を受けないように警戒し、互いに傷つけあわないために、心理的距離の遠さを保った友人との関係性である（大平, 1995）。その一方で、電子メールやインターネット等の手段を用いて、友人関係を切らさないように努力する等、強い同調性も有している（土井, 2014）。石本ら（2009）は、女子中高生を対象に調査した結果、心理的距離が近く、同調性の低い友人関係をとる者は、心理的適応、学校適応ともに良好であるのに対して、表面的な友人関係をとる者は、心理的適応、学校適応ともに不適応であることを指摘している。すなわち、拒否されることの怖さから、友人と表面的に付き合うが、そこでは十分な情緒的なサポートが得られず、また現実の自分を直面し、受け止めてくれる機能を逸することになる。とくに理想的自己と現実的自己の差が多いほど、適応感が低下する。また、適応を内的適応と外的適応から捉えると、外的適応はできていても、内的適応はできていない場合、不確かな自己像をもつことになる。

発達の側面より考えると、小学高学年より情緒的なサポートを提供する相手が、主に保護者から親しい友人へと変化していく時期である (Selman & Schultz, 1990)。また、児童期は、行動や能力など活動性を中心とした自己把握であるが、青年期初期においては対人関係など社会的側面による自己把握へと変化していくと指摘されている (Damon & Hart, 1982)。そのため、友人関係が損なわれている場合、周りに受け入れられていない自分として自己を認識し、自尊感情が低下することが考えられる。実際に友人からの受容や好意あるいは双方向的な友人関係が、孤独感や抑うつ、落ち込みを低め、自尊感情を高めることが示唆されている (Parker & Asher, 1993; Vosk et al., 1982; Wentzel et al., 2004)。また友人からのサポートの少なさ (Cauce et al., 1996) や、友人からの拒否 (Schwartz et al., 1998) が、とくに青年期の生徒に影響を与えていることが示されている。

そのなかでもとくに級友による過去のいじめは、現在の適応と関連しているなど、友達から過去および現在に受けたいじめは適応と負の関連が認められている (Smithymai et al., 2014)。三島 (2008) は、親しい友人からの「いじめ」を小学校高学年の頃に体験した生徒は、そうでない生徒より、高校生になってからも学校不適応感を強くもち、友人に対しても不安・懸念が強いことを示唆している。

このように、いじめをうけた経験のある生徒や、情緒的なサポートを友人から得られていない生徒は、不適応のリスクが高いことが示唆されている。とくに支えてくれる友人をもたない10代の青年には、友情を形成し維持するための社会的スキル訓練が必要な青年もいる (Savin-Williams & Berndt, 1990)。以上より、社会的スキルを向上させる機会を提供することにより、良好な友人関係が促進され、

他者との連帯感を向上し、周りに受け入れている自分を認識することで、結果的に適応感を向上させることができると考えられる。

②個人内要因

まず、社会的コンピテンスが不足している子ども達は、普通の子どもの達と比較して、内在化問題 (抑うつなど) のリスクが高くなること (Burt et al., 2008) や、外在化問題 (非行など) のリスクが高くなること (Wang, 2009) が指摘されている。日本においても、社会的スキルと適応との関連が指摘されており、社会的スキルが発揮されないことが、学校集団の中で承認されないことにつながり、結果的に不適応につながる可能性について示唆されている (粕谷・河村, 2002)。

Trueman (1984) は、不登校生徒の特徴として、不安が強く、分離への大きな恐れを持っていると述べている。また、不登校生徒は、無気力傾向 (本間, 2000) であることや、神経質 (田山, 2008) であることや、内向的 (佐藤, 1968) である等の性格特徴が報告されてきている。

一方、非行生徒の特徴としては、注意欠陥性多動障害との関連が見られること (Offord et al., 1992)、また両親が反社会的障害であった場合や言語的な知能が平均以下であるときに不適応リスクが高まることが指摘されている (Lahey et al., 1995)。

また、このような行動上の問題が生じている生徒の背景には、うつが見られる可能性が指摘されている (Puig-Antich, 1982)。とくに女子においては、10歳時点での内在化問題 (身体的な問題や内気であること) は、13歳までに外在化問題 (反社会的な行動等) へ移行することが示唆されている (Wangby et al., 1999)。また、これらのうつ症状は、物事を知覚する認知の様式と相関があることが指摘

されている（Seligman, 1975）。これらの認知様式についての修正としては、認知行動療法が有効であるとの報告もある（Beck, 1995）。そのため、抑うつ症状が見られる生徒については、早期の段階で相談に乗るなどして、心理的なサポート体制作りが求められている。

不適応リスクを緩和するために必要な視点

最後に、不適応リスク要因についてまとめた上で、不適応リスクを緩和し、子ども達が適応的に学校生活を送るために必要な視点について展望を行う。

不適応リスク要因は、大きく分けて2つの視点から捉えることができる。1つは、社会的コンピテンスの不足といった側面であり、もうひとつは家庭や友人関係の希薄さ、もしくは不安定さに起因するものである。鈴木・森田（2013）は、不適応に至るプロセスとしては、＜社会的コンピテンスの不足＞が＜被受容感の乏しさ＞を媒介し、＜不適応徴候＞に影響を与えるとの過程を明らかにしている。すなわち、社会的コンピテンスが不足することで、周りから受け入れてもらう機会が減少し、その結果不適応の前段階である不適応兆候がみられるというプロセスである。

そのため、今後社会的コンピテンスが不足し、友人関係に不安を抱えている子どもを早期に察知するアセスメント方法の確立が重要となる。社会的コンピテンスが不足している生徒のなかには、すでに友人関係でトラブルとなり、幾度となく教員が仲介する機会を持つことができているケースもある。そのようなケースでは、社会的コンピテンスのなかでも、アサーション（自己主張）スキルの不足によるものなのか、問題解決能力の不足によるものなのか等、その背景や原因について詳しくアセスメントする必要がある。その上で、積み残している社会的スキルをひとつずつ丁

寧に教えていく必要がある。一方、自分を出さず環境に合わせる等して外的適応はできていたとしても、自分の気持ちを伝えることができず内的適応に関しては十分満たされていない子ども達もいる。そのような子ども達は、周囲の大人が気づかないうちに不満を溜め込み、自分らしさが分からなくなり、突然不登校という形や自傷行為という形で顕在化する場合もある。そのため、これらの過剰適応傾向の子ども達の気持ちを察知できるアセスメントツールの開発も今後重要となる。

一方、このようなリスクの高い子ども達には、どのような学級環境を提供することで、リスクを緩和することができるのだろうか。Baker（1998）は、フレンドリーで支持的で暴力がないと感じる学級環境が、学校満足感と関連していることが示唆している。すなわち、支持的な学級状況が、直接的に学校満足感に影響を与えているとともに、ストレスや心理学的な苦痛が低減されることで、間接的にも学校満足感に良い影響を与えていることを報告している。また、我が国において中学生の欠席願望を抑制する要因について調査した研究では、「学校魅力」、「対友人適応」、「学習理解」、「規範的価値」が欠席願望を抑制することが明らかとなっている（本間, 2000）。このように、不適応リスクを緩和する学級環境としては、学習についていけない子どもへの親身なサポート、また規範的価値について伝えていくこと、友人関係を促進すること、そして支持的な雰囲気を作っていくことが重要であることが推察される。

最後に、リスクが高い子ども達には心理的な支援やつながりを提供する大人が少なくとも一人はいることが、様々なリスク状況において子どもをプロテクト（保護）する要因となることが一貫して確認されている（Fraser, 2004）。具体的には、家族や教師等の大人か

らの支持的なサポートが、適応を促進する重要な要素であることが指摘されている (Smokowski et al., 1999)。とくにリスクを持つ子どもにおいては、思いやりのある大人と良好な関係を築くことで、それらの大人をモデルとして問題解決スキル等の社会的スキルについても学ぶ機会となる (Masten et al., 1990)。また、大人との良好な信頼関係を通して社会的スキルを学ぶことは、最終的に子どもの自尊感情を向上させ、環境上のストレスから防御する源となる (Masten, 1994)。以上のように、社会的コンピテンスが不足し、友人関係に不安を抱えている子ども達には、教員やスクールカウンセラーによる温かい関わりが彼らの精神的支えになる。そしてこの温かい関わりを通して、子ども達は人との関わり方を学んでいき、他者との信頼関係を築いていくことにつながり、最終的には自分を受け入れてくれる存在がいることで自尊感情が向上する機会となる。このような子どもと大人との信頼関係を構築するプロセスこそが、子ども達の学校適応を支えていく大きな礎になると考えられる。

〈付記〉本研究は日本学術振興会科学研究費(若手研究(B) 課題番号26780404)の研究助成を受けて行われたものです。

文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Oxford, England: Lawrence Erlbaum.
- Asher, S. R., & Rose, A. J. (1997). Promoting children's social-emotional adjustment with peers. In P. Salovey, D. J. Sluyter, P. Salovey, & D. J. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. (pp. 196-230). New York, NY, US: Basic Books.
- Baker, Jean A. (1998). The social context of school satisfaction among urban, low-income, African-American students. *School Psychology Quarterly*, 13 (1), 25-44. doi: 10.1037/h0088970
- Beck, J. S. (1995). *Cognitive therapy: Basics and beyond*. New York, NY, US: Guilford Press.
- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study Of The Child*, 22, 162-186.
- Buehler, C., Anthony, C., Krishnakumar, A., & Stone, G. (1997). Interparental conflict and youth problem behaviors: A meta-analysis. *Journal of Child and Family Studies*, 6(2), 223-247. doi: 10.1023/A:1025006909538
- Buhrmester, D. (1990). Intimacy of friendship, interpersonal competence, and adjustment during preadolescence and adolescence. *Child Development*, 61(4), 1101-1111. doi: 10.2307/1130878
- Burt, K. B., Obradović, J., Long, J. D., & Masten, A. S. (2008). The interplay of social competence and psychopathology over 20 years: Testing transactional and cascade models. *Child Development*, 79(2), 359-374. doi: 10.1111/j.1467-8624.2007.01130.x
- Coie, J. D., Watt, N. F., West, S. G., Hawkins, J. D., Asarnow, J. R., Markman, H. J., & Long, B. (1993). The science of prevention: A conceptual framework and some directions for a national research program. *American Psychologist*, 48(10), 1013-1022. doi: 10.1037/0003-066X.48.10.1013
- Cauce, A. M., Mason, C., Gonzales, N., & Hiraga, Y. (1996). Social support during adolescence: Methodological and theoretical considerations. In K. Hurrelmann, S. F. Hamilton, K. Hurrelmann, & S. F. Hamilton (Eds.), *Social problems and social contexts in adolescence: Perspectives across boundaries*. (pp. 131-151). Hawthorne, NY, US: Aldine de Gruyter.
- Damon, W., & Hart, D. (1982). The development of self-understanding from infancy through adolescence. *Child Development*, 53 (4), 841-864. doi: 10.2307/1129122
- Dodge, K. A., Bates, J. E., & Pettit, G. S. (1990). Mechanisms in the cycle of violence. *Science*, 250 (4988), 1678-1683. doi: 10.1126/science.2270481
- Durlak, J. A. (1995). *School-based prevention programs for children and adolescents* (Vol. 34):

- Sage Publications.
- 土井隆義 (2014). つながりを煽られる子どもたち：ネット依存といじめ問題を考える (No. 903) : 岩波書店.
- Fraser, M. W. (2004). *Risk and resilience in childhood : an ecological perspective* (2nd ed. ed.). Washington, DC : NASW Press.
- 古市裕一 (1991). 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因. *カウンセリング研究*, 24 (2), p123-127.
- Goodman, S. H. (1987). Emory University Project on Children of Disturbed Parents. *Schizophrenia Bulletin*, 13 (3), 411-423.
- 原田克巳・竹本伸一 (2009). 学校適応の定義 — 児童・生徒が学校に適応するということ. 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 (1), 1-9.
- Harnish, J. D., Dodge, K. A., & Valente, E. (1995). Mother-child interaction quality as a partial mediator of the roles of maternal depressive symptomatology and socioeconomic status in the development of child behavior problems. *Child Development*, 66(3), 739-753.
- 本間友巳 (2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析. *教育心理学研究*, 48 (1), 32-41. doi: 10.5926/jjep1953.48.1_32
- 五十嵐哲也・萩原久子 (2004). 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連. *教育心理学研究*, 52 (3), 264-276. doi: 10.5926/jjep1953.52.3_264
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連. *発達心理学研究*, 20 (2), 125-133.
- 粕谷貴志・河村茂雄 (2002). 学校生活満足度尺度を用いた学校不適応のアセスメントと介入の視点—学校生活満足度と欠席行動との関連および学校不適応の臨床像の検討. *カウンセリング研究*, 35 (2), 116-123.
- 北村晴朗 (1965). 適応の心理: 誠信書房.
- Ladd, G. W. (1996). Shifting ecologies during the 5 to 7 year period: Predicting children's adjustment during the transition to grade school. In A. J. Sameroff, M. M. Haith, A. J. Sameroff, & M. M. Haith (Eds.), *The five to seven year shift: The age of reason and responsibility*. (pp. 363-386). Chicago, IL, US: University of Chicago Press.
- Lee, C. M., & Gotlib, I. H. (1989). Maternal depression and child adjustment: A longitudinal analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, 98 (1), 78-85. doi: 10.1037/0021-843X.98.1.78
- Lahey, B. B., Loeber, R., Hart, E. L., Frick, P. J., Applegate, B., Zhang, Q., & Russo, M. F. (1995). Four-year longitudinal study of conduct disorder in boys: Patterns and predictors of persistence. *Journal of Abnormal Psychology*, 104 (1), 83-93. doi: 10.1037/0021-843X.104.1.83
- Masten, A. S. (1994). Resilience in individual development: Successful adaptation despite risk and adversity. In M. C. Wang, E. W. Gordon, M. C. Wang, & E. W. Gordon (Eds.), *Educational resilience in inner-city America: Challenges and prospects*. (pp. 3-25). Hillsdale, NJ, England: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2 (4), 425-444. doi: 10.1017/S0954579400005812
- 三島浩路 (2008). 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響—高校生を対象にした調査結果から—. *実験社会心理学研究*, 47 (2), 91-104. doi: 10.2130/jjesp.47.91
- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 (1986). 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み. *兵庫教育大学研究紀要*. 第1分冊, 学校教育・幼児教育・障害児教育, 7, 135-146.
- 西平直喜 (1973). 青年心理学 (第7巻) : 共立出版.
- Offord, D. R., Boyle, M. H., Racine, Y. A., Fleming, J. E., Cadman, D. T., Blum, H. M., & MacMillan, H. L. (1992). Outcome, prognosis, and risk in a longitudinal follow-up study. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 31 (5), 916-923. doi: 10.1097/00004583-199209000-00021
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因 : 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討. *教育心理学研究*, 53 (3), 307-319.
- 大平健 (1995). やさしさの精神病理 : 岩波書店.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. (1993). Friendship and

- friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, 29 (4), 611-621. doi: 10.1037/0012-1649.29.4.611
- Puig-Antich, J. (1982). Major depression and conduct disorder in prepuberty. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 21 (2), 118-128. doi: 10.1016/S0002-7138 (09) 60910-9
- Resnick, M. D., Bearman, P. S., Blum, R. W., Bauman, K. E., Harris, K. M., Jones, J., & Udry, J. R. (1997). Protecting adolescents from harm: Findings from the National Longitudinal Study on Adolescent Health. *JAMA: Journal of the American Medical Association*, 278 (10), 823-832. doi: 10.1001/jama.278.10.823
- Rutter, M., Giller, H., & Hagell, A. (1998). *Antisocial behavior by young people*. New York, NY, US: Cambridge University Press.
- 酒井厚・菅原,ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応. *教育心理学研究*, 50(1), 12-22. doi: 10.5926/jjep1953.50.1_12
- 佐藤修策 (1968). 登校拒否児. 国土社.
- Savin-Williams, R. C., & Berndt, T. J. (1990). Friendship and peer relations. In S. S. Feldman, G. R. Elliott, S. S. Feldman, & G. R. Elliott (Eds.), *At the threshold: The developing adolescent*. (pp. 277-307). Cambridge, MA, US: Harvard University Press.
- Schwartz, D., McFadyen-Ketchum, S. A., Dodge, K. A., Pettit, G. S., & Bates, J. E. (1998). Peer group victimization as a predictor of children's behavior problems at home and in school. *Development and Psychopathology*, 10 (1), 87-99. doi: 10.1017/S095457949800131X
- Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness: On depression, development, and death*. New York, NY, US: W H Freeman/Times Books/ Henry Holt & Co.
- Selman, R. L., & Schultz, L. H. (1990). *Making a friend in youth: Developmental theory and pair therapy*. Chicago, IL, US: University of Chicago Press.
- Smithyman, T. F., Fireman, G. D., & Asher, Y. (2014). Long-term psychosocial consequences of peer victimization: From elementary to high school. *School Psychology Quarterly*, 29 (1), 64-76. doi: 10.1037/spq0000053
- Smokowski, P. R., Reynolds, A. J., & Bezruczko, N. (1999). Resilience and protective factors in adolescence: An autobiographical perspective from disadvantaged youth. *Journal of School Psychology*, 37 (4), 425-448. doi: 10.1016/S0022-4405 (99) 00028-X
- Solomon, D., Battistich, V., Watson, M., Schaps, E., & Lewis, C. (2000). A six-district study of educational change: Direct and mediated effects of the child development project. *Social Psychology of Education*, 4 (1), 3-51. doi: 10.1023/A:1009609606692
- 菅原ますみ (1997). 養育者の精神的健康と子どものパーソナリティの発達: 母親の抑うつに関して. *性格心理学研究*, 5 (1), 38-55.
- 鈴木美樹江・森田智美 (2015). 不適応に至るまでのプロセスに着目した高校生版学校不適応感尺度開発. *心理臨床学研究*, 32 (6), 711-715.
- 田山淳 (2008). 中学生における登校行動とバウムテストの関連について. *心身医学*, 48 (12), 1033-1041.
- Trueman, D. (1984). What are the characteristics of school phobic children? *Psychological Reports*, 54 (1), 191-202. doi: 10.2466/pr0.1984.54.1.191
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離. *教育心理学研究*, 42 (1), 21-28. doi: 10.5926/jjep1953.42.1_21
- Vosk, B., Forehand, R., Parker, J. B., & Rickard, K. (1982). A multimethod comparison of popular and unpopular children. *Developmental Psychology*, 18(4), 571-575. doi: 10.1037/0012-1649.18.4.571
- Youniss, J., & Smollar, J. (1985). *Adolescent relations with mothers, fathers, and friends*. Chicago, IL, US: University of Chicago Press.
- Wångby, M., Bergman, L. R., & Magnusson, D. (1999). Development of adjustment problems in girls: what syndromes emerge? *Child Development*, 70(3), 678-699.
- Wang, M.-T. (2009). School climate support for behavioral and psychological adjustment: Testing the mediating effect of social competence. *School Psychology Quarterly*, 24(4), 240-251. doi: 10.1037/a0017999
- Weintraub, S. (1987). Risk Factors in Schizophrenia: The Stony Brook High-Risk Project. *Schizophrenia Bulletin*, 13(3), 439-450.

- Wentzel, K. R., Barry, C. M., & Caldwell, K. A. (2004). Friendships in Middle School: Influences on Motivation and School Adjustment. *Journal of Educational Psychology, 96*(2), 195-203. doi: 10.1037/0022-0663.96.2.195
- Widom, C. S. (1999). Posttraumatic stress disorder in abused and neglected children grown up. *The American Journal of Psychiatry, 156*(8), 1223-1229.